The influence of self-esteem on mood-congruent effect in self-relevant works

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23747

自己関連語を用いた気分一致効果に関する自尊感情の検討

池上貴美子，五十嵐早貴

The influence of self-esteem on mood-congruent effect in self-relevant words.

Kimiko IKEGAMI, Saki IGARASHI

問　題

楽しいときに楽しかったことを思い出してもっと楽しくなったり、気分が良いときは気分が悪いときよりも対象を肯定的に評価するなど、われわれは感情が記憶や判断などの認知にさまざまな影響を及ぼすことを経験している。

伊藤(2000a)によれば、Norman(1980)が認知研究における感情の必要性を指摘して以来、認知心理学では感情と認知との相互作用を扱った研究が行われ(Blaney,1986)、気分一致効果（Bower,1981; Forgas,1991)や特性一致効果(Derry & Kuiper,1981)として知られている。気分一致効果とは、特定の気分が生起すると、その気分と整合的な評価価値をもつ情報処理が促進される現象であり(池上,1992)、生起要因やメカニズムが注目される（谷口,1997)。特性一致効果とは、個人の安定した感情特性（抑鬱傾向など）と一致した感情価（悲しいなど）をもつ情報が選択的に処理される現象であり、抑鬱傾向の強い人が過去の記憶を再生する際に、ネガティブな内容を再生しやすいなどである。

伊藤(2000a)によれば、情報処理における知的側面を認知 cognition、快・不快などの情的側面を感情 affect とし、状態としての感情—気分状態—と、特性としての感情—感情特性—に分類される。「気分 mood」は漠然としたものであり，気分を起こした対象が不明確で、一定時間持続する比較的穏やかな感情状態である。気分は日常頻繁に観察され、実験室においても容易に喚起できる感情であり、主にポジティブな気分（例；楽しい）とネガティブな気分（例；悲しい）が扱われる。これに対して「情動 emotion」は、怒りや恐れのような強い生理的喚起をはっきりと自覚できるものであり、気分よりも強度が強く、明確な対象によって喚起される一時的な感情状態を表し、「感情」は、気分と情動を含む包括的な概念とされる。一方、感情特性とは特定の感情反応への安定した気質傾向で、永続的な人格面を構成するものである。特定の感情の生起は感情特性に依存するため、感情経験や感情表現に個人差が生じると考えられている。感情特性には、外向性(extroversion)や神経質傾向(neuroticism)のような広範な特性や、特性不安(trait anxiety)、臨床的な抑鬱(sub-clinical depression)、自尊感情(self-esteem)のような感情に特定的な特性があり、さらに抑圧(repression)のようなネガティブな思考や経験を調整もしくは変化させる傾向に関連している特性を含むとされる(伊藤,2000a)。

これらの気分一致効果が生起するメカニズムに関しては、感情ネットワークモデル(Bower,1981)が提唱されるが、ポジティブ気分とネガティブ気分による効果の非対称性からネットワークモデルに対する修正が試みられている。また特性一致効果のメカニズムに関してはセルフスキーマモデル(Beck,1976)が提唱されるが、詳細は伊藤(2000a)にゆずることとする。

ところで伊藤(2000a)は、認知に及ぼすこれら

平成 21 年 9 月 30 日受理

の気分や感情特性の研究における問題点として気分一致効果と特性一致効果がそれぞれ独立に検討されてきた点を指摘する。気分一致効果に関する研究では、被験者の気分を誘導することで被験者群を統制し、個人に特定の要因（個人差）が考慮されなかった。一方、個人差を扱う研究では、個人の中であまり変化しない安定した感情特性を扱い、特性一致効果として独立に研究がなされ、感情特性を分類するのみでその時の気分状態は考慮されてこなかった。以上から、一時的な気分状態か、安定した感情特性のどちらかのみに焦点を当てるのではなく、両者を同時に測定してその独立あるいは複合的効果を分析することが必要となってくる。感情が認知に及ぼす影響を検討する際に、気分状態に加えて感情特性をも扱うことにより、個人差をも考慮した気分の影響に関する研究が待たれる。

さらに伊藤(2000a)によれば、特性一致効果の研究では、抑鬱や不安特性などネガティブな感情特性に焦点が当てられているが、ポジティブな特性を取り扱った研究は少ない。例えば自尊感情が高いというポジティブな特性は、ポジティブな記憶や判断にどのように関連するのかについて明らかにされた研究は多いとはいえない。遠藤(2000)によれば、自尊感情はその人の言動や意識態度を基本的に方向づけるとされ、感情特性の中でもポジティブな特性であり、感情経験や感情表現に現れる個人差が大きいと考えられる自尊感情と一時的な気分状態を同時に検討することは、今後の個人差を考慮した気分の影響に関するひとつの知見を提供すると考えられる。そこで本研究では、自尊感情について焦点をあてることとする。

その際、従来の気分一致効果の研究においては、刺激材料を自己に関連づけて処理する（刺激語が自分にどれ位あてはまるかなど）自己関連的情報処理が気分一致効果の生起に重要な要因であるとされてきた。感情特性（個人差)を扱った研究でも自己関連的情報処理においては気分一致効果が見られるとされている(Blaney,1986;伊藤,2000b)。しかし自己関連づけ課題を用いて気分状態と感情特性の両者を考慮に入れた研究は多いとはいえず、自己関連的情報処理をする場合に、感情特性よりも気分の影響が見られるかどうかについては明らかにされていない。

そこで自己関連的情報処理をする場合に、特性よりも気分の影響が見られるか否かを分析することは、気分状態と感情特性との複合的効果を示す一端となる。本研究では、気分と特性の両者の相互作用を明らかにし、感情的情報処理過程の新たな統合的アプローチを築くための基礎的データの一つを提供することを試みる。

本研究では気分状態と感情特性（自尊感情）の両者を考慮し、気分一致効果の生起に重要な要因とされている自己関連的処理を促す課題を用いて、気分誘導前の認知傾向を調べた上で、気分をポジティブかネガティブに誘導して、気分誘導後の認知傾向を調べることにより、感情特性（自尊感情）がどのように認知（自己関連づけ判断）に影響を与えるのか、感情特性（自尊感情の高低)によって誘導した気分(ポジティブ誘導、ネガティブ誘導)に違いが生じるのか。その結果、感情特性（自尊感情）と気分（ポジティブ気分、ネガティブ気分）はどのように認知（自己関連づけ判断）に影響を与えるのかについて検討する。

目　的

本研究では認知に及ぼす気分状態と感情特性の両者の影響を以下のように実験的に検討する

(1) 気分誘導前と誘導後の気分状態の変化が、感情特性（自尊感情）による影響を受けるか否かを分析する。感情尺度における肯定的感情と否定的感情について感情価別に、自尊感情（高群、中群、低群　以下H,L,M群；個体間要因）×誘導気分（ポジティブ誘導群、ネガティブ誘導群；個体間要因）×測定時期（気分誘導前、気分誘導後：個体内要因）の３要因計画で、自然な気分状態と気分誘導後の気分状態が感情特性（自

尊感情）によってどのように影響を受けるかを検討する。

(2) 認知（自己関連判断）において、自尊感情（H群、M群、L群；個体間要因）×誘導気分（ポジティブ誘導群、ネガティブ誘導群；個体間要因）×気分誘導前後の刺激語の感情価（気分誘導前ポジティブ語、気分誘導後ポジティブ語、気分誘導前ネガティブ語、気分誘導後ネガティブ語；個体内要因）の3要因計画で、自尊感情が認知に影響を与えるのか、気分誘導が認知に影響を与えるのか、自尊感情と気分誘導のどちらがより認知（自己関連処理）に影響を与えるのかについて検討する。

方　法

実験参加者　石川県下のK大学生111名(18～24歳)。山本・松井・山城(1982)の邦訳によるRosenberg(1965)の自尊感情尺度を実施し、その得点を基準に自尊感情の高い者、低い者に分けた。記入不備がある者を除いた110名の自尊感情尺度の平均得点は、34.49点(SD=7.37)で、平均得点＋0.5SD以上の28名を高自尊感情群(H群)とし、平均得点－0.5SD以下の29名を低自尊感情群(L群)とした。そして自尊感情の平均得点に近い順に、中立的な自尊感情特性を持つ者を24名選び中自尊感情群(M群)とした。さらに誘導する気分(ポジティブあるいはネガティブ)によって、高自尊感情・ポジティブ気分誘導群(Hp群；15名)、中自尊感情・ポジティブ気分誘導群(Mp群；10名)、低自尊感情・ポジティブ気分誘導群(Lp群;16名)、高自尊感情・ネガティブ気分誘導群(Hn群:13名)、中自尊感情・ネガティブ気分誘導群(Mn群:14名)、低自尊感情・ネガティブ気分誘導群(Ln群:13名)の6群を構成した。

刺激

気分誘導　実験参加者の要求特性を抑え、比較的強い感情状態を誘導するために、映像による気分の操作を行った。具体的には、ポジティブ気分誘導群には日本アニメの「となりのトトロ」、ネガティブ気分誘導群には日本アニメの「火垂るの墓」の一部分を呈示した。映像の長さは約4分30秒であった。また、映像による気分誘導に加え気分の喚起を強めるために、映像の中で使われていた音楽の聴取による気分誘導を加えた。菅野(2000)によれば、映像作品で使用される音楽は、「背景」とされているようにその作品の中ではあくまでも脇役的な存在であるが、想像以上に私たちの記憶や感情に影響を及ぼす。音楽によって喚起される感情が自然な状態に近いものであり、またVelten法などの言語的な気分誘導で生じる要求特性や認知プライミングの問題を抑えることができる(谷口,1991a)。これらより、映像の中で使われている音楽を使用することとした。ポジティブ気分誘導群には「となりのトトロ」のサウンドトラックより「ねこバス」「五月の村」を、ネガティブ気分誘導群には「火垂るの墓」のサウンドトラックより「ほたる」「戦争または空襲」を使用した。

認知課題（自己関連判断）　自己関連的な情報処理を促す課題として、性格表現用語の自己関連度評定課題を行った。伊藤(2000b)により、自己関連的情報処理は気分一致効果が生起する重要な要因とされ、気分による認知の歪みが自己に関連する情報で顕著に見られることが指摘されている。具体的には、40の刺激語が「どの程度自分自身に当てはまるか」を6段階（1;全く当てはまらない,2;ほとんど当てはまらない,3;やや当てはまらない,4;少し当てはまる,5;ほとんど当てはまる,6;非常に当てはまる）で評定させた。伊藤(2000b)、筒井(1997)に倣い刺激語は青木(1971)より性格表現用語の学生による社会的望ましさの評定中央値をもとに、評定中央値が3.5以下の語をポジティブ語（「親切な」など）、6.5以上をネガティブ語(「軽薄な」など)とし、形容詞・形容動詞・連体詞のポジティブ語から30語、ネガティブ語から30語選択した。そして気分誘導前の課題で用いる語と気分誘導後の課題で用いる語は別々の語とした。そ

れぞれ認知課題 A(ポジティブ語;15 語、ネガティブ語 15 語)と認知課題 B（ポジティブ語;15 語、ネガティブ語;15 語）とした。

また、初頭効果と新近性効果を除くために、感情価が曖昧である評定値が4.4から5.6までの20語を選び、それぞれの認知課題の評定リストの始めと終わりに5語ずつ加えた。

気分の測定　気分誘導前と誘導後の気分状態を確認するため、伊藤(2000b)に倣い寺崎・古賀・岸本(1991)の多面的感情尺度短縮版の中から肯定的感情(「活気がある」など)に関する“活動的快”“非活動的快”“親和“と否定的感情(「退屈な」など)に関する”抑鬱・不安”“敵意”“倦怠”を用いた。これらの下位尺度は、それぞれの感情を表す形容詞5項目から作成されており、現在の感情状態について評定するものであり、全30項目であった。本実験では、“現在、以下の感情をどの程度感じているか”を6段階(1;全く感じていない 2;ほとんど感じていない 3;あまり感じていない 4;少し感じている　5;かなり感じている　6;非常に感じている)で評定させた。

手続き

実験は集団で冊子回答形式で行った。実験の意図が実験参加者に伝わると、気分評定や認知判断への回答において様々な影響が生じる恐れがあるので、実験参加者には、実験の目的について自己関連語の適切性を調べるためと教示した。冊子内容は大きく分けて質問Aと質問Bからなり、最初に質問Aを回答させ、気分誘導後に質問Bを回答させた。質問Aは{自尊感情尺度(10項目)、認知課題A(40項目)、多面的感情尺度短縮版(30項目)}であり、質問Bは{多面的感情尺度短縮版(30項目)、認知課題B(40項目)、多面的感情尺度(30項目)であった。また、映像についての感想として、ポジティブかネガティブか選択させた。気分誘導のための音楽は、映像を呈示した後から流し始め、実験が終了するまで継続して流した。実験の所要時間は約25分であった。

結　果

気分誘導の効果

気分評定値を高得点ほどその尺度を表すように数値化したものを気分得点とした。肯定的感情の尺度（“活動的快”“非活動的快”“親和”）においては、高得点ほどポジティブな感情を感じており、否定的感情の尺度（“抑鬱・不安”“敵意”“倦怠”）では高得点ほどネガティブな感情を感じているということになる。肯定的感情および否定的感情の条件ごとの気分得点の平均値の変化を Figure1 および Figure2 に示した。実験参加者の気分が実験者の意図通りに誘導されているかを確かめるため、感情価別に、自尊感情(H群、M群、L群；被験者間要因)×気分誘導(ポジティブ気分誘導群、ネガティブ気分誘導群；被験者間要因)×測定時期(気分誘導前、気分誘導後；被験者内要因)の3要因分散分析を行った。その結果、肯定的感情においては、誘導気分の主効果および誘導気分と測定時期の交互作用が有意であった($F(1,75) = 22.523$, $p < .001$; $F(1,75) = 54.301$, $p < .001$)。　誘導気分と測定時期の交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、測定時期の気分誘導後の主効果およびポジティブ気分誘導群の主効果および測定時期におけるネガティブ気分誘導群の主効果が有意であった（$F(1,150) = 63.647$, $p < .001$; $F(1,75) = 18.068$, $p < .001$；$F(1,75) = 8.607$, $p < .001$)。肯定的感情の平均得点は気分誘導前では群間に有意差が無いが、誘導後ではポジティブ気分誘導群がネガティブ気分誘導群より有意に高得点であった。またポジティブ気分誘導群は、気分誘導前より誘導後でより高得点となったが、ネガティブ気分誘導群においては、気分誘導後に誘導前より得点が低下した。

否定的感情においては、誘導気分の主効果と測定時期の主効果および誘導気分と測定時期の交互作用が有意であった($F(1,75) = 4.750$, $p < .05$; $F(1,75) = 57.452$, $p < .001$; $F(1,75) = 9.357$, $p < .005$)。また自尊感情の主効果に有意傾向が

あった($F(2,75)=2.972, p<.10$)。誘導気分と測定時期の交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行ったところ、測定時期の気分誘導後の主効果およびポジティブ気分誘導群の主効果および測定時期におけるネガティブ気分誘導群の主効果が有意であった($F(1,150)=12.069, p<.001$;$F(1,75)=56.591, p<.001$;$F(1,75)=10.218, p<.005$)。否定的感情は気分誘導前では有意差が無かったが、気分誘導後ではポジティブ気分誘導群よりネガティブ気分誘導群の方が強くなった。またポジティブ気分誘導群でもネガティブ気分誘導群でも否定的感情は気分誘導前が誘導後より強かった。

より詳細に分析するために、多面的感情尺度短縮版の肯定的感情と否定的感情に関する６つの下位尺度別に、自尊感情(H 群,M 群,L 群；被験者間要因)×気分誘導(ポジティブ気分誘導群,ネガティブ気分誘導群；被験者間要因)×測定時期(気分誘導前,気分誘導後；被験者内要因)の３要因分散分析を行った。

活動的快・非活動的快・親和では、誘導気分の主効果および誘導気分と測定時期の交互作用が有意であった($p<.001$)。誘導気分と測定時期の交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行ったところ、気分誘導前では平均得点に有意な差はなかったが、気分誘導後では、ポジティブ気分誘導群の方がネガティブ気分誘導群よりも肯定的感情の下位尺度得点が高かった。また、ポジティブ気分誘導群では気分誘導前よりも誘導後で得点が高かったが、ネガティブ気分誘導群では誘導後は誘導前より各下位尺度得点が低下した。

抑鬱・不安では、自尊感情の主効果および測定時期の主効果および誘導気分と測定時期の交互作用が有意であった($p<.01$)。単純主効果の検定より、気分誘導前では有意差がないが、誘導後ではネガティブ気分誘導群はポジティブ気分誘導群よりも得点が高くなった。倦怠では、測定時期の主効果が有意であった($F(1,75)=64.303, p<.001$)。すべての群において気分誘導前の方が誘導後より得点は高かった。

肯定的感情においては気分誘導前には群間で差がなかったのに対して、気分誘導後ではポジティブ気分誘導群がネガティブ気分誘導より感情得点が高かった。また否定的感情については、すべての群において気分誘導後は誘導前より低下したが、気分誘導前では群間差がなかったのに対して、気分誘導後ではネガティブ気分誘導群がポジティブ気分誘導群より否定的感情が強くなった。よって、期待された気分が実際に誘導されたと考えられる。

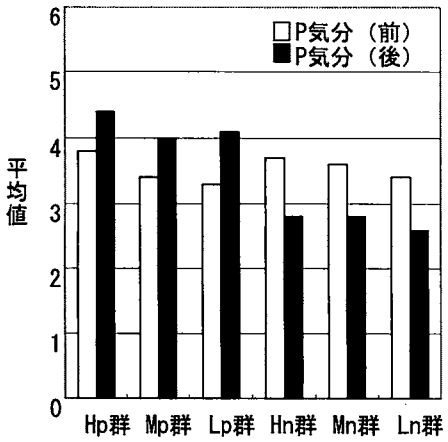

Figure 1. 気分誘導前後の気分状態の変動（肯定的感情＝P気分）

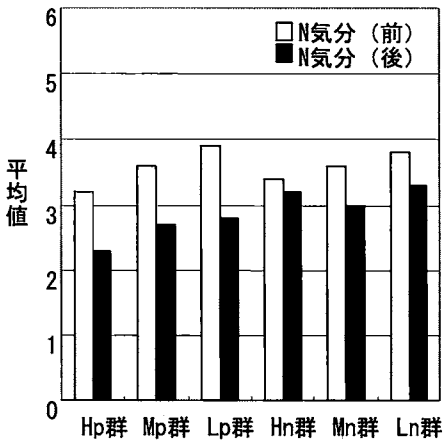

Figure 2. 気分誘導前後の気分状態の変動（否定的感情＝N気分）

認知課題（自己関連判断）

実験参加者が刺激語に対して、自分にどの程度あてはまっているか判断した性格表現用語の自己関連度評定の平均値と標準偏差を求め、刺激語の感情価別のグラフをFigure3, Figure4に示した。

性格表現用語の自己関連度評定について、自尊感情(H群、M群、L群.; 被験者間要因)×誘導気分(ポジティブ気分誘導群、ネガティブ気分誘導群; 被験者間要因)×気分誘導前後の刺激語の感情価(気分誘導前ポジティブ語、気分誘導後ポジティブ語、気分誘導前ネガティブ語、気分誘導後ネガティブ語)の分散分析を行った。その結果、気分誘導前後の刺激語の感情価の主効果および自尊感情と気分誘導前後の刺激語の感情価の交互作用および誘導気分と気分誘導前後の刺激語の感情価の交互作用が有意であった($F(3,225)=2.848, p<.05$; $F(6,225)=6.089, p<.001$; $F(3,225)=4.324, p<.01$)。また自尊感情と誘導気分と気分誘導前後の刺激語の感情価の交互作用が有意傾向であった($F(6,225)=2.117, p<.10$)。

自尊感情と誘導気分と気分誘導前後の刺激語の感情価の交互作用が有意傾向であったので、単純交互作用の検定を行った結果、自尊感情・誘導気分と気分誘導後のネガティブ語の交互作用が有意であった($F(2,300)=4.193, p<.05$)。自尊感情・気分誘導前後の刺激語の感情価とポジティブ気分誘導群の交互作用及びネガティブ気分誘導群の交互作用が有意であった($F(6,225)=2.448, p<.05$; $F(6,225)=5.758, p<001$)。誘導気分・気分誘導前後の刺激語の感情価とL群の交互作用が有意であった($F(3,225)=6.596, p<.001$)。そこで単純・単純主効果の検定を行ったところ、自尊感情における

ネガティブ気分誘導群の気分誘導後ポジティブ語以外のすべての組み合わせでの主効果が有意であった($F(2,300) = 4.461, p < .05$; $F(2,300) = 3.132, p < .05$; $F(2,300) = 7.375, p < .001$)。ポジティブ誘導群の気分誘導後のポジティブ語の主効果及びネガティブ気分誘導群の気分誘導後ポジティブ語が有意傾向であった($F(2,300) =2.408, p<.10$; $F(2,300)-2.820, p<.10$)。誘導気分におけるL群の気分誘導後ネガティブ語の主効果が有意であった($F(1,300) =11.746, p<.001$)。気分誘導前後の刺激語の感情価におけるHp(自尊感情高・ポジティブ気分誘導)群の主効果およびHn(自尊感情高・ネガティブ気分誘導)群の主効果およびLn(自尊感情低・ネガティブ気分誘導)の主効果が有意であった($F(3,225) = 10.143, p < .001$; $F(3,225) = 3.850, p < .05$; $F(3,225) = 7.210, p < .001$)。

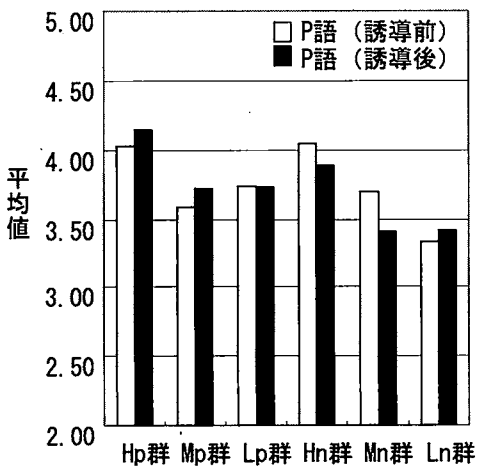

Figure 3. 気分誘導前後の性格表現用語の自己関連評定値の変動（ポジティブ語）

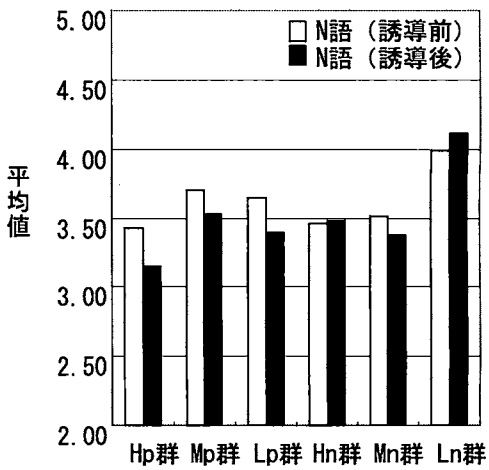

Figure 4. 気分誘導前後の性格表現用語の自己関連評定値の変動（ネガティブ語）

1.気分誘導前後、刺激語別の群間の比較

(1)ポジティブ語の自己関連度評定の群間比較

ポジティブ語に関してFigure 3 に示すように気分誘導前ではHp群とHn群、Mp群とMn群、Lp群とLn郡の間には自己関連度評定に有意な差はなかった。また、H群はL群よりも有意に自己関連度評定が高かった(p<.05)。しかし気分誘導後では、ポジティブ気分誘導群では有意差はなかったが、ネガティブ気分誘導群では、H群がM群、L群より自己関連度評定が有意に高かった。

(2)ネガティブ語の自己関連度評定の群間比較

ネガティブ語に関してFigure 4 に示すように気分誘導前ではHp群とHn群、Mp群とMn群、Lp群とLn群の間に自己関連度評定値に有意差はなかった。しかし気分誘導後ではLn群がLp群より有意に高く(p<.05)、ネガティブ気分誘導群では、L群がH群、M群よりも有意に自己関連度評定値が高かった。

2.気分誘導前後、刺激語別の群内の比較

(1)ポジティブ語とネガティブ語の群内の比較

Figure 3 とFigure4 に比較されるようにHp群では気分誘導前でも気分誘導後でもポジティブ語がネガティブ語より有意に自己関連度評定が高かった(p<.05)。Hn群では、気分誘導前ではポジティブ語がネガティブ語より有意に高かったが、気分誘導後では有意差はなかった。Ln群では、気分誘導前でも気分誘導後でもネガティブ語がポジティブ語より自己関連度評定が有意に高かった(p<.05)。

(2)ポジティブ語の自己関連度評定の群内比較およびネガティブ語の自己関連度評定の群内比較においては有意差はみられなかった。

考　察

本研究では、感情特性と気分状態の両者を考慮に入れた、統合的アプローチによる気分一致効果について自己関連度判断を用いて検討した。

1．気分の変動の検討

まず、気分誘導について以下に考察する。気分誘導前は高自尊感情群では、ポジティブ気分をネガティブ気分よりも強く感じており、一方、低自尊感情群では、ネガティブ気分をポジティブ気分よりも強く感じていた。このことから、自尊感情が高い人は自然な状態においても、ネガティブな感情よりもポジティブな感情を感じやすく、逆に自尊感情が低い人はポジティブな感情よりもネガティブな感情を感じやすいことが示唆される。ネガティブ気分誘導後では、高自尊感情群も低自尊感情群もともに肯定的感情が減少し、否定的感情はほぼ変化がなかった。このことから、どの特性においても気分が期待通りに誘導されており、自尊感情が高いか低いかという特性によって誘導した気分に変化は生じなかったと考えられる。

しかし、肯定的感情においては、期待した通りの結果となったが、否定的感情においてはすべての群において気分誘導後の方が気分誘導前より低いか、ほぼ変化がなかった。この理由として、ネガティブな感情になることへの抵抗が生じたことが推察される。Isen(1984)は、人間にはネガティブな気分から回復するため、ポジティブな認知をしようとする回復動機があるとしている。また、普段私達はビデオなどの映像を、楽しむためや退屈さを解消するために見ることが多い。否定的感情の倦怠において、すべての群が誘導前より誘導後において有意に低下したことから、映像を見ることは倦怠(退屈な、つまらないなど）を感じにくくし、そのため倦怠は誘導後で有意に低くなったのではないかと考えられる。また映像によらず、谷口(1991b)によると、音楽は本質的に美的表現と美的経験を追求する機能を備えており、抑鬱的な音楽でも、強いネガティブ感情を喚起することはないために、気分の効果が非対称になることがある。このことから、すべての群で否定的感情が弱くあるいは変化がなかったことが推察される。

2．認知課題（自己関連判断）について

自己関連判断について次に考察する。気分誘導前の自然な気分状態での自己関連度評定では、

高自尊感情群はネガティブ語よりポジティブ語を自己に関連づけていた。また、低自尊感情群は、ポジティブ語よりネガティブ語を自己に関連づけていた。このことから、自然な状態において自尊感情が高い人はポジティブな認知を行い、自尊感情が低い人はネガティブな認知をすることが示唆される。これは、気分誘導前の自然に生起した気分状態が安定した感情特性と一致したため、気分誘導前の自然な状態では気分一致効果が認められたことが推察される。

気分誘導後においては、高自尊感情群では自己関連度評定値はポジティブ語がネガティブ語より高く、一方、低自尊感情・ネガティブ気分誘導群では自己関連度評定値はネガティブ語がポジティブ語より高かった。これを刺激語の感情価別にみると、ポジティブ語においては、ネガティブ気分誘導後で、高自尊感情群が中自尊感情群や低自尊感情群よりも評定値が高かった。ネガティブ語においては、ポジティブ気分誘導後で、高自尊感情群が中自尊感情群や低自尊感情群よりも低く、逆に低自尊感情群ではネガティブ気分誘導群がポジティブ気分誘導群よりも高かった。つまり、気分誘導後では、高自尊感情・ポジティブ気分誘導群と低自尊感情・ネガティブ気分誘導群において気分一致効果がみられた。特に、ネガティブ気分に誘導された低自尊感情群において気分一致効果の傾向が強く現れた。このことから、認知判断において自尊感情の高い人は、気分の影響を受けにくく、自尊感情の低い人は気分の影響を受けやすい傾向があることが示唆された。

自尊感情の高い人が気分の影響を受けにくかった理由としては、自尊感情の高い人はポジティブ語を自己に関連づけ、ポジティブな気分を維持するために、ポジティブな認知を変化させなかったということが考えられる。一方、自尊感情の低い人では気分一致効果が現れたことについては、先行研究と同様の結果であった。なかでもネガティブ気分に誘導された場合に、特に気分の影響を強く受け気分一致効果が生じたのは、ネガティブ気分はポジティブ気分よりも自己焦点的注意を向けやすい(Sedikides,1992)ためと考えられる。

しかし Smith & Petty(1995)は、ネガテイブ気分を誘導した場合、自己関連的情報処理をしない場合は、自尊感情の高い（気分規制的傾向が強い）人はネガテイブな気分を規制しポジティブな思考や記憶を検索するため、気分不一致効果が生じる。それに対し、自尊感情の低い（気分規制傾向の低い）人は典型的な気分一致効果が生じるとしている。一方、伊藤(2000a)によれば自己関連的情報処理ではそのような意識的な処理方略が用いられにくいため、自尊感情が高い人でも気分一致効果が得られるとしている。本研究ではネガティブ気分に誘導したときに自尊感情が高い人は、気分に影響されず、自己関連的認知判断において気分一致効果が認められなかった、このことから、気分を誘導して自己関連的な情報処理を行ったとしても、必ずしも気分一致効果が得られるわけではなく、感情特性などの他の要因の影響が示唆される。

この点をより明確にするには、本研究では自己関連度評定のみの施行であったので、他の自己関連づけ課題、例えば自己関連度評定したものについての自由再生や自伝的記憶の想起について調べること、また自尊感情だけでなく、多面的な感情特性の効果を調べることも必要とされる。また、気分誘導に関してより強いネガティブ気分誘導を行うことも想定される。

3.まとめ

本研究では、以下の点が明らかにされた。

① 気分誘導前の自然な気分状態は、感情特性に依存する可能性がある。

② 自尊感情が高い人は、自己関連判断（自己関連的情報処理）において、気分よりも感情特性の影響を受け、気分の影響を受けにくい。

③ 自尊感情が低い人は、自己関連判断において感情特性よりも気分の影響を受けやすい。

しかし今後の課題として、本研究では自己関連判断（自己関連度評定）のみしか施行しておらず、先行研究に示される再生記憶を指標とした気分一致効果についての追試、また他者関連度評定や関連づけを行わない統制条件などの検討も待たれている。気分誘導についても、強いネガティブ気分を誘導できる手続き(高橋,1996,2002)を検討することも必要であろう。それにより、感情と認知を、特に自己関連的情報処理との関連において詳細に検討することが可能になることが示唆される。

要　約

認知に及ぼす感情―気分と特性―の影響は、それぞれ気分一致効果と特性一致効果として、別々に検討されてきた。しかし近年では、一時的な気分状態と、安定した感情特性のどちらかに焦点をあてるのではなく、両者を同時に測定してその独立あるいは複合的効果を検討することが重要となってきた。このような複合的効果を検討した研究では、抑鬱や不安特性などネガティブな特性に焦点をあてた研究が多く、自尊感情が高いなどのポジティブな特性について検討した研究は必ずしも多いとはいえない。そこで本研究では、気分一致効果の生起に重要な事態とされている自己関連的情報処理を促す課題を認知課題として用いて、自尊感情と気分状態の両者を考慮して、気分誘導前の認知判断の傾向を調べた上で、気分をポジティブかネガティブに誘導して、気分誘導後の認知判断の傾向を調べた。このことにより、特性（自尊感情）がどのように認知に影響を与えるか、特性（自尊感情）によって、誘導した気分（ポジティブ気分誘導、ネガティブ気分誘導）に変化が生じるか、その結果、特性（自尊感情）と気分（ポジティブ気分、ネガティブ気分）はどのように認知に影響を与えるかを検討した。

その結果、気分誘導前では感情特性（自尊感情）と同じ感情価の気分状態を強く感じており、認知判断でも気分一致効果が認められた。気分誘導では、自尊感情が高い人も低い人も、期待通りの気分が誘導されていたことから、自尊感情の高低によって誘導された気分が異なるものではなかった。気分誘導後では、自尊感情が高い人は、ポジティブ気分に誘導しても、ネガティブ気分に誘導しても、ポジティブ語に対する自己関連度評定が高かった。一方、自尊感情が低い人は、自己関連度評定において気分と一致する傾向があり、気分の影響を強く受けた。

伊藤(2000a)は、自己関連的処理を行った場合、自尊感情が低い人も自尊感情が高い人も気分の影響を受け、気分一致効果が得られるとしたが、本研究の結果は、自尊感情の高い人は気分の影響を受けにくかった。このことから、自己に関連づける判断を行ったとしても、必ずしも気分一致効果の生起がみられるわけではなく、感情特性やその他の要因の影響を受けることが示唆された。さらにこのことを明らかにするためには、自己関連度評定のみならず、再生課題等のより認知的な課題を施行することが待たれる。このことにより、感情と認知が、いかに自己関連的情報処理に関連するかについて詳細な検討が進展することが期待される。

引用文献

青木孝悦　1971　性格表現用語の心理辞典的研究―445語の選択、分類および望ましさの評定―　心理学研究, **42**, 1-13.

Beck,A.T.　1976　*Cognitive therapy and emotional disorders*. New York : International University Press (伊藤,2000aによる)

Blaney,P.H.　1986 Affect and memory. *Psychological Bulletin*, **99**, 229-246.(伊藤,2000aによる)

Bower,G.H.　1981 Mood and memory. *American psychologist*,**36**,129-148.(伊藤,2000aによる)

Derry. P. A, & Kuiper, N. A.1981 Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of abnormal psychology*, **90**, 286-297.

遠藤由美 2000　「自尊感情」を関係からとらえ直す　実験社会心理学研究,**39**,150―167.

Forgas,J.P.　1991　*Emotion and social judgements,*

Oxford:Pergamon Press.(伊藤による)

池上知子 1992 社会的認知の情報処理　多鹿秀継・川口潤・池上知子・山祐嗣(共著)『情報処理の心理学—認知心理学入門—』サイエンス社　Pp106-156.

池上知子 1998 社会的認知と感情　山本眞理子・外山みどり(編)『社会的認知』誠信書房　Pp 77－101.

Isen,I.M.,1984 Toward understanding the role of affect in cognition. In R.S.Wyer & T.K.Srull(eds), *Handbook of social cognition*:vol.3(Pp.179-236).Hillsdale,NJ: Lawrence Erlbaum (伊藤,2000a による)

伊藤美加 2000a　気分一致効果を巡る諸問題—気分状態と感情特性—　心理学評論,**43**, 368—386.

伊藤美加 2000b　自己関連情報処理における気分一致効果—自伝想起課題による検討—　心理学研究, **71**, 281—288.

菅野禎盛　2000 音楽と映像の相互作用　谷口高士(編著)『音は心の中で音楽になる一音楽心理学への招待』北大路書房 Pp204—205.

Sedikides,C. 1992 Mood as a determinant of attentional focus. *Cognition and emotion*,**6**,129－148.(筒井,1997 による)

Smith,S.M., & Petty,R.E. 1995 Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of personality and social psychology*,**68**,1092－1107. (伊藤,2000a による)

高橋雅延 1996　記憶と感情の実験的研究の問題点　聖心女子大学論叢, **86**,61—102.

高橋雅延 2002 感情の操作方法の現状　高橋雅延・谷口高士(編著)『感情と心理学—発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開—』　北大路書房 Pp66—80.

谷口高士 1991a　認知における気分一致効果と気分状態依存効果　心理学評論, **34**,319－344.

谷口高士 1991b　言語課題遂行時の聴取音楽による気分一致効果について　心理学研究,**62**,**88**－95.

谷口高士 1997 記憶・学習と感情　海保博之(編著)『「温かい認知」の心理学』金子書房　Pp53－75.

寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究,**62**,350－356.

筒井美加 1997 自己関連語における気分一致効果 心理学研究, **68**, 25－32.

山本眞理子 2001 自尊感情尺度　堀洋道・山本眞理子(編著)『心理測定尺度集Ⅰ』サイエンス社　Pp29－31.

Velten,E. 1968 A laboratory task for induction of mood state. *Behavior* research *and therapy*, **6**, 473－487. (谷口,1991 による)